

U-24 男子日本代表のチームづくりに関する事例研究

久保 侑生（200711944、ハンドボール方法論）

指導教員：會田 宏、河村 レイ子

キーワード：ハンドボール、チームづくり

【目的】

これまでのチームづくりに関する研究では、指導者やチームに関わりのない第3者の視点から行われているものが多く、選手自身の視点から明らかにされている研究はない。選手からの視点を持つことは、チームづくりの実態を、チームの内部からより具体的に明らかに出来ると考えられる。本研究では、第20回世界学生ハンドボール選手権大会に向けたU-24男子日本代表チームのチームづくりを「監督からみた評価」、「スコアからみた評価」、「選手からみた評価」の3つの観点から事例的に明らかにすることを目的とした。

【方法】

第20回世界学生ハンドボール選手権大会で4位の成績を収めたU-24男子日本代表チームを研究対象とした。対象期間は、第1回強化合宿を行った2009年8月から、大会が終了した2010年7月までであった。

分析のための基礎資料として、監督自身が記した強化計画・大会総括報告書、本大会の予選リーグ4試合と3位決定戦を記録したDVDを再生し作成したランニングスコア、選手として参加した本研究者が大会事前合宿と大会期間中に記したフィールドノートを用いた。

【結果と考察】

1. 監督からみた評価

「メダル獲得」を目標として、24歳以下の年齢別強化指定選手から選手を選考した。その基準は優先順位の高いものから順に、得点力、フィジカル、スピードであった。その中で、国内の大会において所属チームでゲームに出場している選手を優先していた。ゲーム構想は、攻撃では優れた個人技術をベースに、チームの攻撃パターンからシュートを狙うこと、スピードを活かした1次速攻・2次速攻で得点を狙うこととし、防御では、9mエリア内（フリースローライン内）をコンパクトかつ予測的に守り、6:0をベースに、相手選手の利き手側やポストプレーヤーに特に注意し防御を展開することであった。

チームの活動評価・反省は、「ディフェンスから速攻がよく決まった」、「世界と戦える身体ができていた」、「戦う姿勢があった」、「役割分担が出来ており、

チームの雰囲気良かった」であった。課題として、「ディフェンスの1:1、フェイント、ポストに対する守り方」、「攻めあぐんだ時の打開策」があがった。

2. スコアからみた評価

U-24男子日本代表の得点源は速攻での得点であり、U-24男子日本代表は前半、後半を走りぬく走力を武器としていた。対戦相手の得点源はポストシュートとミドルシュートであり、大きな失点要因であった。U-24男子日本代表は対戦相手に比べセット攻撃におけるミス数が少なかった。U-24男子日本代表は対戦相手に比べ退場数が少なく、攻撃・守備共に数的優位の時間が長かった。

3. 選手からみた評価

全体を通してチームワークがよく、雰囲気が悪くなるようなことはなかった。立ち上がりミスを重ね、相手に主導権を握られること、数的優位時のオフenseで全員の共通理解を高めることが課題であった。クイックスタートと速攻でおすことはミーティングで常に強調されていた。大会期間中は、実践に近い攻防練習を中心に行い、試合で出た課題は次の日の練習で修正出来るようなメニューが組まれていた。しかし、自チームの分析から「数的優位時のオフense」が課題としてあがったため、練習の時間により共通理解を深める必要があると考えられる。相手の分析から、各試合前のミーティングで相手の分析・特徴をつかみ、そこから「ゲームプラン」へとつなげることが出来ており、内容も試合が進むにつれ濃いものになっていた。

【結論】

監督からみた評価、スコアからみた評価、選手からみた評価のいずれにおいても、「速攻での得点が多かった」という共通点が見られた。このことは、チーム全体としてチームづくりやゲームの戦い方の共通理解が確実に行われていたことを示していると考えられる。監督も選手も今大会を通してチームの雰囲気が良かった事をあげており、チームづくりの土台は「チームの雰囲気づくり」であり、このことがチームづくりをよりスムーズに進行出来た理由と考えられる。